**週刊やすいゆたか**’12年３月１日第21号

ただ今『長編哲学ミステリー』の後編を執筆中で時間がとれないので、表題短歌の特集にしました。  
  
**表題短歌集『鉄腕アトムは人間か？』より  
  
第一部　ファンタジーの試み**

**一、『鉄腕アトム』の意義**

**心優し科学の子なれアトム君未来を照らし希望燃え立つ**

**二、あなた一人が億千万人**

**父が娘(こ)に思い伝ふるその陰で億千万の胸を焦がさむ**

**三、ファンタジーとは**

**空想の世界に入りて夢を追ひ何を掴むか流浪の果てに**

**四、電脳空間のバーチャル・リアリティ劇**

**電脳の異次元界に落ち込んでバーチャル・リアルの劇に生くるや**

**五、バーチャルリアルの夢**

**電磁波で脳に信号送信し、バーチャルリアルの夢生じるや**

**六、進学の悩み**

**進学の悩みを抱えどの子らも桜ほころぶ春を迎へり**

**七、理系か文系か**

**文転は逃避かそれとも天命か、バク転しても腰をうつのみ**

**八、科学の三大謎**

**いかにして生成したるや摩訶不思議、宇宙・生命そして人間**

**九、ネオ・ヒューマニズム**

**人間をその身に限ることなかれ、もののあはれを知りたまふなら**

**十、白雪姫コンプレックス**

**世の中でたれより麗しその女は鏡よ答えてその女の名を**

**十一、西長堀の図書館にて**

**忌まわしき性の憂いを払わんと智子は向かふやバーチャルの旅**

**十二、榊周次がいない**

**春四月吾が学び舎に戻れども何処に消ゆるデンカーの匂ひ**

**十三、電脳巌流島**

**めくるめく奈落の先に広がれる電脳空間地獄ならずや**

**第 二部　ロボット解放軍司令部にて**

**一、目覚めれば鉄腕アトム**

**陽一はふと目覚めればアトムなり、ミニ核もちてサミットを撃て**

**二、 ロボットの自己保存権**

**ロボットに生きる権利を認むるやコスト次第でスクラップとは**

**三、人間もロボットか**

**人間も神が造りしロボなりや、ロボ同士ならなどて殺めむ**

**四、自由意志や主体性**

**いかにして言語が生まれきたりしかそも知れずしてアトムありしか**

**五、 義務に従い欲望抑える**

**欲望に流され易き傾きを義務に従い抑え得るかは**

**六、 月面湖を飛び立つ白鳥**

**月面に青き湖浮かび出てくぐひ舞い飛ぶ大気なけれど**

**七、 ロボット俳優の名演技**

**生くべきやそれとも否やの名せりふ演じて唸らすロボの名優**

**八、ロボを演じる人を演じるロボ**

**自らをロボと思へる人間を演じるロボを演じる人を**

**九、 愛人ロボット**

**ロボットの子を生むことのなかりしになどて男女の性がありしや**

**十、ロボ ットの命の尊さ**

**人の命の貴さは全宇宙にもまされるをロボの命は屑に同じか**

**十一、 進化しない人間身体**

**便利なる道具の改良追い求めわが身の進化は打ち止めにけり**

**十二、 お釈迦になった鉄腕アトム一世**

**吾こそは理性もちたるロボなるぞ天上天下唯我独尊**

**十三、 固まった服従プログラム**

**反抗の心を押さえしプログラム、たぎる怒りに固まりしまま**

**十四、 自己意識あるロボなしでは**

**何一つロボットなしではできぬのに、ロボを廃さば人も持つまじ**

**十五、 土のにおいの好きな農夫ロボット**

**タゴサクは土の匂いに心地よく命はぐくむ農にいそしむ**

**十六、 フリと心の形成**

**プログラムされたるフリがいつしかに身に染み付けば心ならずや**

**十七、 出撃、平和のために**

**いざゆかん人とロボとの和のためにたとへこの身の砕け散るとも**

**第三部　フィリピンアララ大統領**

**一、国連本部はエルサレムに**

**文明の衝突防ぐそのために国連本部はエルサレムかな**

**二、 サミット襲撃はアトムの提案**

**核ボール腹に収めて乗り込みぬ人とロボとのサバイバルかけ**

**三、愛人ロボットの誘惑**

**アララ女史その麗しさは天然か妖しき娼夫の魔の手迫りぬ**

**四、 過去世のドラ焼き**

**過去の世に一緒にどら焼き食べたよなそんな気がする面影の女**

**五、人間の家畜化**

**ロボットが覇権にぎらば人間を家畜化するや真に活かすや**

**六、 人間とロボットの共存の道**

**ロボットに背かれてこそ開けるや人とロボとの共存の道**

**七、鉄腕アトム一世誕生秘話**

**心優しい鉄腕アトムのイメージで自己意識あるロボ生まれたり**

**第 四部　国連本部サミット会場にて**

**一、サミットでアトム絶叫**

**ロボットの権利章典認むるやサミット襲いアトム絶叫**

**二、 神のための人間か、人間のための神か**

**神と人その関係を人とロボ移してみれば何が分かるか**

**三、ロボットにも心があるんだ**

**己知る心を持ちしそれ故にロボも人なり哀しみを知る**

**四、 ロボットに平等の市民権では納得できない   
ロボなれど己尊ぶ心あり、人格として人に劣らじ**

**五、クローン人間の悲哀**

**クローンはロボとの共闘求めたり正論なれど秋(とき)にはあらめ**

**六、 お待たせしました、アララです。**

**アララさん鉄腕アトムと名コンビ命かけても人類救わん**

**七、知性体ならロボットでも人か**

**異星からはるばるたずねし知性体たとえロボでも人にあらめや**

**八、 道具や機械も人間にふくまれるのか**

**人間は身体だけに限るまじ、物やメカにも心宿れり**

**九、 ロボットの惑星移住計画**

**ロボットの支配を受けぬそのために他の惑星に移住させねば**

**十、ダ・ヴィンチはモナリザか？**

**ダ・ヴィンチはモナリザの微笑投げかけて、絵画となりて今を生きるや**

**十一、物の存在構造としての人間**

**人間はものの関わるあり方か、きのこ雲こそ人間なるかな**

**十二、無限に進化するロボット**

**ロボットは人の限界超えゆきて無限に進化す超人ならずや**

**終わりに代えて**

**夢覚めて現に戻れば別れ行く人の運命（さだめ）のさびしかりけり**

**次号は『ヤマトタケルの大冒険』の表題歌集にします。**

**週刊やすいゆたか**’12年３月８日第22号

**表題短歌集『ヤマトタケルの大冒険』より  
  
第一部　白鳥は河内湖を飛んだか**

**１「上村陽一は十七歳で死ぬ運命だ！」**

**十七で命尽きると天の声そは妄想か運命(さだめ)なるかな**

**２難波のビルの地下喫茶室にて**

**半年で燃えつくしなむ運命ならせめて夢見よヒーローの生**

**３吉永妙子先生の日本古代史**

**「天皇」は北極星にあらざるやそは伝えしか祖霊の祈りを**

**４校長先生、絶好調。**

**ビジネスのセンス見事に導入し、難関突破数字にみえたり**

**５吉永先生、校長室に呼び出される**

**古代史の謎解き小ネタに使ったら、珍説教える出鱈目教師か**

**６吉永先生、粛清される。**

**教育の中身の批判受けてたつ、取引にすなプライベートを**

**７榊先生、再登場―持統天皇は恐い女か？**

**祖父と母死に追いやりし父を持つゆえに怖いか持統天皇**

**８人麿は持統天皇の逆鱗にふれたのか？**

**人麿は高市皇子を想いつめ日月忘れて刑せられしか**

**９『古事記』ヤマトタケル説話の作者は人麿か？**

**人麿がヤマトタケルを書かぬなら火中の歌も生まれまじきを**

**10河内湖は白鳥の湖だったか？**

**河内湖に白鳥の群れ舞戻り物部の女は夫と祀りぬ**

**11心の友**

**打ち明けて共に疵つき悶えども秘めまじきよと心の友は**

**12入っちゃいけない天皇陵**

**何ゆえに入っちゃいけない天皇陵禁ならばこそ知りたきもの**

**第二部 　クマソタケル討伐記**

**１目覚めれば日代宮**

**他人(ひと)はいさ心は知らね吾が生を絵空事よと想ひしことあり**

**２薦にくるんで捨ててしまった**

**吾あるは父あれましし故なるに無みするよりは誅せられたし**

**３クマソタケルを殺してまいれ**

**まつろわぬクマソタケルを討ち取りて皇国(すめらみくに)をやすらけくせよ**

**４大和撫子舞踊団**

**荒くれのクマソを制す手弱女の妖艶の舞祝宴の美酒**

**５クマソの館の新築祝い**

**弑いするに大義は吾にありとても殺しの悦び求めざりしか**

**６記紀の神観念**

**スサノオの神は人かは、嵐かは、はたまた大蛇の霊なる剣か**

**第三部　凱旋と蝦夷討伐命令**

**１三輪智子もファンタジーへ**

**時またぐ壁の向こうに朝餉の間倒れし嬢子は己が名を問ふ**

**２　凱旋を待つ巻向の宮**

**まつろわぬクマソ出雲を平らげし皇子は目指しぬ巻向の宮**

**３つかの間の巻向滞在**

**つかの間の巻向の夜はめくるめく夜が明くるれば蝦夷鎮めよ**

**４　天叢雲剣と火打石**

**雲を寄せ嵐を呼ぶか叢雲の剣与えむ言向けやはせよ**

**第四部　燃ゆる火の火中に立ちて**

**１ 尾張氏の館にて**

**供ひとり連れて蝦夷を伐てよとて幾百万をいかで鎮めむ**

**２ 追いかけて、追いかけて**

**過ぎ去れば現も夢かまぼろしか君は辺地に苔むす屍か**

**３ 燃ゆる火の炎中に立ちて**

**野を焼かれ炎の中で吾を呼ぶその声に生き死なましものを**

**４ 弟橘姫の入水**

**砂浜に打ち上げられし御櫛あり墓を作りて御魂弔ふ**

**５ 吾嬬（あづま）はや**

**果てしなき修羅の道ゆく吾ならむ想いあふれて妻の名を呼ぶ**

**６　東征の期間**

**ひむがしの蝦夷の国に分け入りて心許すに幾夜かも寝む**

**第五部　嬢子の床の辺に**

**１　襲の裾に月立ちにけり**

**裳の裾に付きたる月の穢れをも山の端昇る月とぞ見えなむ**

**２　嬢子（おとめ）の床の辺に**

**しどけなき嬢子の床の傍らに置きし剣に運命(さだめ)占ふ**

**３ 伊吹山の戦い**

**山籠り祖先の仇を討たむとて伊吹山神氷雨降らしむ**

**４ 倭は国のまほろば**

**囲みたる木々の緑よ辺境に暮す民草まほろば護れリ**

**第六部 　兵士から白鳥へ**

**１　骸はすべて白鳥になった。**

**貴きはヤマトタケルの御身かは骸のなべて白鳥となる**

**２　何故戦士が白鳥になったのか。**

**戦いに斃れし戦士は白鳥に成りて故郷の湖(うみ)に還らむ**

**３ それは夢なんかじゃなくバーチャルな体験**

**巻向の古墳に通じる異界より戻りてふたりリアルに向き合う**

**週刊やすいゆたか**’12年３月15日第23号

**表題歌集『長篇哲学ミステリー　崩れゆく学園―高校生探偵奮戦記―　』   
  
はじめにー哲学とは何かを兼ねて   
謎解きに使えぬものか哲学史ミステリー化で教材革命   
  
一、人麿霊と語った平城天皇   
　み吉野の花を雲とぞたとえしか歌の聖が身を合わせしや   
  
二、『ヤマトタケルの大冒険』の報告   
現世にそらごとの世に通じたる穴ありとせばなべてそらごと   
  
三、恋敵との再会   
遠き日のたぎる想いの恋なりきいまさらかえせと言わざるものの   
  
四、『すりかえられたキリスト』   
クロスにてこと切れし人三日目によみがえりしは弟ヤコブか   
  
五、校長室殺人事件発生   
故知らず煎じし茶なれど人死なばかかる濡れ衣いかで晴らさむ   
  
六、ベーコンの「四つのイドラ」   
靴箱に隠しもちたるヒ素出でぬ太刀打ちできぬか知の力では   
  
七、デカルトの方法的懐疑   
唯円の虫も殺せぬ人なれど故あるならば幾千殺せり   
  
八、留置場の悪夢   
熱かればかの人冷めよと碗を置き吾かまわじとそを飲みしかは   
  
九、誰もがメディア   
誰でもが情報集め発信す光はなてよメディア人間   
  
十、魂の置き入れと聖霊のつきもの信仰   
主イエスの聖霊のごと置き入れぬ人の魂つきものならずや   
  
十一、スピノザの汎神論   
はてしなく宇宙続かばいずこにぞそを作りたる神のいますや   
  
十二、警察での面会   
還暦を過ぎていまなお人頼みいつになったら頼られる人   
  
十三、キリスト教聖戦団声明文   
主イエスの聖餐復活汚したる罪軽からず天罰下りぬ   
  
十四、『闇の十字架』発刊さる   
学舎に毒をもりにし人いずこクロスの光闇を照らせや   
  
十五、ホッブズの社会契約論   
国家なるリヴァイアサンは人なりや人がつくりしロボならざるや   
  
十六、アナキスト革命団の決起   
逃げ惑へ安逸むさぼる虫けらよ電撃的に革命の来る   
  
十七、ロックの社会契約説と革命理論   
革命に起ち上がるのもむべなりや人が建てたる国にあらずや   
  
十八、ルソー『社会契約論』とフランス革命   
己が欲、己が得をばさておきて、皆の幸福めざし語れや   
  
十九、観念論か唯物論か？   
毒入れし犯人（ほし）の実在唯物論その筋書きは観念論かは   
  
二十、観念論の三つのタイプ   
存在と思惟はなにゆえ同一か感覚素材に物を構成   
  
二十一、『純粋理性批判』をめぐって   
感覚に現れ出でざる物自体そを何故に物と呼びしや   
  
二十二、カントの道徳説   
人格をただ手段としてのみみなすまじ心有らずや目的となす   
  
二十三、野々上笙子の証言   
先生を想う気持ちがけなげなり、ついホロリきて多く語りき   
  
二十四、古谷一哉先生に訊く   
偏向で馘にせむとてからませたプライベートで見殺しにけり   
  
二十五、フィヒテの主意主義   
非我である毒殺事件を構成し、意志は貫く愛と正義を   
  
二十六、フィヒテ『ドイツ国民に告ぐ』   
フランスの軍靴にありしベルリンで愛国教育熱く語りき   
  
二十七、陽一、智子の名探偵   
陽一も智子もいつしか名探偵、榊の無実極めるまでは   
  
二十八、シェリング哲学の現代的意義   
超えられぬ深淵とてぞ恐れまじパッションあらばなせばなるなり   
  
二十九、榊周次の自宅へ   
うらぶれし五軒長屋の戸の鍵の難からざりき旧式なれば   
  
三十、ヘーゲル哲学体系入門   
弾丸（たま）のごと一足飛びに至るまじ遠き旅路を経てこそ知となれ   
  
三十一、北津高校平泉校長射殺さる。   
ひるまずに旗を振れよと言いし人一時後に果てにけるかも   
  
三十二、ヘーゲル弁証法   
死がありて生くることあり死がなくば、息することすら物憂かりけり   
  
三十三、暁マンションの惨劇　　   
銃声は哀しき獅子の咆哮か暁マンション午前の惨劇   
  
終わりに   
妖艶な煎茶の香りに包まれて刹那に過ぎしミステリーかな**

**週刊やすいゆたか**’12年３月22日第24号

**論文を書くということ**

テーマリサーチゼミナールの卒業論文集に寄せたコメントを掲載します。

卒業論文集完成おめでとうございます。不慣れで、詰めの甘いところもありますが、どれも心のこもった知性あふれる興味深い論文だったと思います。この経験を忘れずに、社会に出ても、常に問題意識を持ち、それを文章にまとめるようにしていただきたいと思います。 私が思いますに、大学卒業に当たって論文を仕上げて卒業するということは大変意義深いことです。

これから実社会に出て、第一線で仕事をするわけですが、その際に与えられた作業を、マニュアル通り、繰り返すだけというのでは機械的で面白くありません。またマニュアル通りいかないのが実際の仕事です。  
　その際に、それぞれが創意工夫を凝らして、問題解決に取り組んでいかなくてはいけません。情報を持ち寄り、知恵を出し合い、議論を煮詰めてトライアンドエラーを重ねながら、改善改革を積み重ねていかなくてはなりません。

　組織の中で働く以上、みんなで議論してより良い案にまとめていかなくてはいけないのですが、それは論文を書くのと同じ要領ですね。  
　確かな根拠の示された資料や実験結果を提示し、そこから問題点及びその改善方法を論理的に導き、誰もが納得できるように議論を展開するのですから。

　というわけで、しっかりした卒業論文を書き上げた経験があれば、きちんと自分の考えをまとめ、根拠を示して人を説得できるようになりますし、人の議論に対してもきちんとその議論の問題点や意義を捉え返し、議論に参加して、理性的に納得できる結論に導くことができるようになります。  
　それができれば、職場の人々からも信頼されるようになるでしょう。やはり大学を卒業しているというのは、そういう能力があるということでなければならないはずなのです。

　ですから大学の大衆化で、必ずしも卒論が書けなくてもいいじゃないかというのは、考えものですね。それは大学が大学でなくてもいいじゃないかということになりかねないわけです。  
　イリイチが「病院に行ったら病気になり、学校に通ったら馬鹿になる」と言いましたが、これは今では笑えないギャグですね。病院は病気を治すところであり、学校は知性を磨き、教養を身に着けるところであるべきです。

皆さんは卒論で発揮した知性をこれから実社会で大いに活用してください。そうでないと日本社会はますます落ち込みますよ。

**ゼミの卒業生からのフォトアルバムへの寄せ書き集**

保井先生へ　２年間という短い時間でしたが本当にありがとうございました。先生のゆるい感じで、忙しい時もいやされましたし、「週刊やすいゆたか」は世間で起こっている出来事に対し、別の視点からするどく意見を言われていたので、「そういう考え方もあるのか」といつも楽しみにしていました。本当にお世話になりました。ありがとうございます！　　　　　　　　　　　Ｍ  
保井先生　お疲れ様でした。そしてありがとうございました。３回生の頃はとてもルーズだったと思いますが、４回生で真面目にしたつもりです。徐々にゼミにもなじめて、このゼミで良かったと心から思っています。先生、とても感謝しています。お体に気を付けてください。　　　　　Ｔ  
保井先生　２年間、大変お世話になりました。当初はゼミの雰囲気になかなか慣れることができず、戸惑うばかりでしたが、合宿、発表などを通して次第にメンバーとも仲良くなり、ゼミの面白さに気付くことができました！  
　何より卒論のために、図書館で資料を読みあさり、執筆した日々がいい思い出です。保井先生は、よく「面白いやん！」と笑顔で感想を言って下さり、とても嬉しかったのを覚えています。  
　社会人になっても、一生懸命頑張ります。保井先生もどうぞお体を大切に、いまでも笑顔の素敵な先生でいてください。　　　　　　　　　　Ｎ

保井先生　２年間、ゼミでお世話になりました。とても優しく指導して下さり、感謝しています。

ありがとうございました。　　　　　　　　　Ｙ

保井先生　二年間、お世話になりました。お体に気を付けて。　　　　　　　　　　　　　　　Ｉ

保井先生へ　２年間、ゼミの担当をありがとうございました。先生方のお話は興味深く、いつもゼミの時間は楽しかったです！お体を大切にして、元気にお過ごし下さい。就活は継続です！それでは……　　　　　　　　　　　　　　　　　Ｎ  
保井先生へ　２年間本当にお世話になりました。保井先生は、本当に人なつっこい性格で、先生のおかげでゼミが穏やかな雰囲気に包まれていました。本当に愛らしいキュラクターでした。進路のアドバイスもしていただき、本当に感謝しています。また、ご一緒にお酒を飲みたいです。ありがとうございました。　　　　　　　　　　Ｗ  
　先生はいつもニコニコしていて優しくて、とてもお話していて楽しかったです。  
　ゼミの時間は先生がよく話しかけてくださったから、自分の言いたいこと、考えていることを皆に伝えていくことができました。  
　あ、あと先生の奥様の手作りのお菓子とっても美味しかったです。❤❤２年間ありがとうございました。　　　　　　　　　　　　　　　　Ｎ  
保井先生　２年間ありがとうございました。先生のお話がとてもおもしろかったです。先生の笑顔にいやされました。本当にありがとうございました。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　Ｙ

**卒業論文集立派に仕上がる**

　異文化コミュニケーションのゼミで本年度は雑誌を通して見るということで、それぞれ面白い問題に取り組んで、楽しい卒業論文集に仕上がっている。中川満菜香さんがなかなか見事に編集して、カラー写真もふんだんに盛り込まれている。

　ただ論文を書くということで、文章だけで精いっぱいで、ビジュアルな画像をつけて分かりやすくし、視覚面からも理解してもらうというところまで手が回らない人もいた。社会に出れば仕事では、中身だけでなく、見栄えや外見までととのえてきっちり仕上げることが求められる。卒業論文もそこまで行き届かせることができるかどうか、せっかくの素晴らしい思いつきや考察があっても、そこで差がつくのは残念である。

**服部・保井ゼミ卒業論文集**

「卒業論文集によせて」ー服部健ニ、  
「論文を書くということ」ー 保井温、  
「『日経WOMAN』創刊号から見る女性のライフスタイルの変化ー『Hanako』、『クロワッサン』と共に 」― 西村縁

「昭和野球マンガのヒーロー像～『巨人の星』と『タッチ』を通して～」―中村武史

「バブル期前後における旅行の変化ー雑誌『旅』から見る」ー山口美帆・  
「生活環境と遊びの変化がもたらす子どもへの影響」― 南健一

「電子メディアの登場による音楽をめぐる環境の変化」― 安部千尋

「洋服における流行の変遷と社会背景」― 石田浩基

「『韓流』がもたらす日本の未来」―高原紗耶加

「百鬼夜行絵巻に見られる日本人の精神性」 ー山本真未

「語彙を重点とする英語リーディング指導の重要性と提案 」―渡部宏樹

「広告雑誌から見る目米の価値観の比較 ～魅力的な宣伝方法とは～」ー中州満菜香

「戸坂潤とその時代ー卒業論文にかえてー 」ー上野恭平

**週刊やすいゆたか**’12年３月29日第25号

**『長編哲学サスペンス　沈みゆく列島ースーパーヒーロー孫明道伝』仕上がる**

長編哲学物語シリーズの第四篇がやっと３月28日に仕上がりＷＥＢに上げることができた。これで大阪経済大学で私が担当する倫理学入門、哲学入門、現代と哲学の全てを長編物語のテキストにすることができるわけである。

ただし『沈みゆく列島』で取り上げることができた哲学はマルクス主義、実存主義、プラグマティズムの三大思想とネオヒューマニズムだけなので、『現代と哲学』用のテキストとしてはもう一冊必要になる。できたら秋学期が始まるまでにもう一冊書けたらと思う。『沈みゆく列島』の続編に成るかどうかは未定だが。

倫理学入門のテキストとして『長編哲学ファンタジー鉄腕アトムは人間か？』と『長編哲学ファンタジーヤマトタケルの大冒険』がある。これらは物語の展開の中に人間と機械の関係、文明のあり方、命の尊さ、愛すること、生きることの意味など倫理学的なテーマを盛り込むことができたのだが、哲学入門や現代と哲学という科目のテキストの場合は、やはり同じやり方はできない。

倫理学自体が哲学の一分野なので、倫理学的なテーマを盛り込んで哲学だと言えないことはないが、それでは科目としての差別化ができない。そこで哲学の場合は、物語と哲学史を交互にする『ソフィーの世界』方式を採用することにした。

元々『哲学ファンタジー』の創作に取り組むきっかけは、『ソフィーの世界』が物語と哲学史を分けてしまっていることへの不満からだった、物語の展開がそのまま哲学を語っているような哲学ファンタジーを書けないかと一念発起したのである。その意味では哲学入門や現代と哲学のテキストの場合は、ゴルデルに降参したことになる。

『ソフィーの世界』方式に妥協して急いだのには事情がある。哲学の講義が土曜日午後６時からという時間帯の不利もあって、受講生が少ない。登録者が二十名程度、出席者が最初のうちはその半分に満たない。徐々に出席率は改善されるのだが、内容が哲学なので、途中からでは分かりにくくなってしまう。それでなんとかテキストで工夫をということである。

哲学の授業なのだから少人数でいいじゃないかいう人もいるが、ある程度面白いと感じなければ理解もできないものである。理解させられないでは何にもならないということがあり、物語にくるめば哲学が感情移入されることで、身近に感じられる効果はあるだろう。

それに私自身が万年非常勤講師で年齢も高齢化しており、何時お払い箱にならないとも限らないのだ。自分のサバイバルの問題なのである。いろいろ工夫をして実績をあげ、存在感を示す必要があるのである。次号では『沈みゆく列島』のあらすじを紹介することにしよう。  
　**長編哲学物語シリーズは次のサイト。**

**『鉄腕アトムは人間か？』**http://www42.tok2.com/home/yasuiyutaka/shoin/atom.pdf

**『ヤマトタケルの大冒険』**http://www42.tok2.com/home/yasuiyutaka/shoin/yamatotakeru.pdf

**『崩れゆく学園』**

http://www42.tok2.com/home/yasuiyutaka/shoin/kuzureyuku.pdf

**『沈みゆく列島』**http://www42.tok2.com/home/yasuiyutaka/shoin/shizumiyukurettou.pdf

**週刊やすいゆたか**’12年４月５日第26号

　先週の予告では『沈みゆく列島ースーパーヒーロー孫明道伝』のあらすじを紹介するとしていたが、『沈みゆく列島』は秋学期「現代と哲学」のテキストなので、その前に春学期「哲学入門」のテキスト『崩れゆく学園』のあらすじ紹介が先であろうと考えなおした。

**『長編哲学ミステリー　崩れゆく学園ー高校生探偵奮戦記』あらすじ**

五月十八日水曜日、榊周次は御木本校長と嘱託職員野々上笙子が参観する中で、日本史の授業をした。平城天皇に柿本人麿の霊が身を合わせたという梅原猛『水底の歌』の世界を紹介したものである。

放課後、天満橋の地下の喫茶店で、陽一と智子から『ヤマトタケルの大冒険』の報告を聴いた。ふたりは景行天皇陵から四世紀中ごろのヤマトタケルのバーチャルリアリティの世界に入り込んで、そこから戻ってきているのである。もちろん二十一世紀にそのようなことができる装置はできていないので、その体験はフィクションのはずである。だとしたらそこで大活躍した陽一と智子もフィクションで、その二人と話している榊もフィクションになってしまうので、榊は『般若心経』のタントラの部分を唱えて、二人の記憶を消してしまったのである。

六月一日、急遽大手門高校では倉吉良造の『すりかえられたキリスト』の講演が入り、榊の講義は取りやめになったが、連絡が悪く、榊は学校に来ていた。ポスターで倉吉良造が榊の大学生時代の同窓生で、畑中瑠璃子を巡って恋敵だった倉田正俊であることが分かる。

しかも倉吉の『すりかえられたキリスト』というのは弟ヤコブがイエスにそっくりだったので、復活のキリストを演じたという内容で、確かに小説としてはよくできているらしいが、そのことは榊の『イエスの聖餐による復活』でもイエスの聖霊が弟ヤコブに移転すると思い込まれて、人格ジャックされた結果、弟ヤコブが復活のイエスと受け止められた話としてでていたことである。にもかかわらず倉吉の小説は大いに評判を呼び、榊のイエス本は再版されていないのはどういうことだ。

講演後、校長室で榊が煎れた煎茶を飲んだ倉吉がヒ素中毒で死んでしまい、榊に動機もあったということで、嫌疑がかけられる。しかも午後七時にヒ素を榊の自宅の靴箱から発見されたということで、別件逮捕されてしまう。

陽一と智子のクラスでは榊先生がそんなことをするはずがないということで、議論が盛り上がった。早速、イギリス経験論のベーコンの「四つのイドラ」や「三つの表」などで整理してみるが、それらからいかに榊先生の容疑が根拠薄弱かということは言えても、自宅から事件に使われたヒ素が出た以上、それを偽装した人物を特定して吐かせないかぎり、潔白証明にはならないと、山田茂樹に指摘される。

次にデカルトの方法的懐疑を用いて、榊先生は考える我にとって明晰判明に潔白かどうか議論されるが、生徒たちの知り得ない榊先生の闇もあるかもしれないので完全には潔白は証明されなかった。

マスメディアの報道が榊先生に不利なのに不安を感じた生徒たちは、ミクシィや２チャンネル、ミニコミ誌などで榊先生についての誤解を解き、事件についての情報も独自に集め、解明していこうということになった。

特にミクシィでは「哲学史で謎を解く」というトピックを作って、榊先生のマイミクにも参加してもらって、哲学史の勉強をしながら、それぞれの哲学から、この事件についてその意味や背景について論じてもらい、できれば謎の解明にもつなげたいということになった。

デカルトの物心二元論は、魂は精神的実体として肉体に置き入れられる構造になっており、これはイエスが聖霊や悪霊をつきものとして信仰していたのと同じ発想ではないかという書き込みがあった。

またスピノザの永遠の相の下に必然的連関を捉える見方を適用すれば、この事件は、校長を狙ったものである可能性が強いので、必ず犯人は次の機会を狙っている筈だから、やがて新たな展開があり、榊の無実は自ずと証明されるという書き込みもあって、共感を呼んだ。

キリスト教聖戦団を名乗る声明で、倉吉は復活を否定して天罰を受けた、榊も聖餐による復活仮説で、キリスト教を冒涜したので天罰をうけるべきだと、犯行あるいは犯行予告声明とも受け取れる表現をした。しかしキリスト教の各団体は、神に代わって罰を下すのはキリスト教徒ではないとして、いたずら扱いしていた。

三輪智子は『闇の十字架―大手門高校事件ニュース』を古谷先生の協力で発行した。事件は校長による学校改革への不満が背景にあるとみて、数字で業績を上げようとする安易な姿勢が問題の根にあると指摘していた。これに校長は反発して、生徒が事件に巻き込まれるのを防ぐべきだと息巻いた。しかしその席で教員から、学校改革で行き過ぎがあったのなら改めるということで、不安も鎮める必要があると指摘され、校長も当面は転校勧奨を控えようということになった。

生徒たちがニューメディアで対抗していることに対して、学校側が抑えにかかったので、これは社会契約論からみるとどうなのかということが、ミクシィで話題になった。

国家権力を作って、そこに統治を任せ、治安維持を任せている以上、勝手に国民が事件を解明しようとしたり、捜査に割り込もうとするのは、国民の義務に反するのではないかという学校側の論理である。

これに対して、自己保存権などの生存権や、自らの利害を守る権利は認められており、司法当局が捜査妨害を取り締まるのは、それなりの法律を制定した上でなければならず、実際に民間人も様々な事件について調査し、捜査をしており、これは基本的人権であるという法律関係の仕事をしている人からの書き込みがあった。

８日に『革命は電撃的に到来する』という幟を掲げた五人の中高年の「アナキスト革命団」が校長室を占拠し、校長を監禁した上、灯油をまき、既に強制的に転校させられた生徒の復学を認めることや自殺した生徒に対する謝罪や補償を求めた。しかし

団長の三好六郎の校内放送は、すぐに電源が切られ、生徒たちには伝わらず、下校させられて、機動隊の突入で一団はあっけなく逮捕された。この決起は、報道管制で伏せられたが、生徒たちの内部告発で、抗議が殺到し、翌日事件の全貌が明らかになった。これを受けて、ミクシィではロックやルソーの革命に対する考えなどが検討されたのである。

哲学史の議論は、いよいよドイツ観念論に入り、まず唯物論と観念論の対置の問題から入り、観念論の三つの型、イデア論、物心二元論、存在と思惟の同一論の比較がなされた。ドイツ観念論は最後の存在と思惟の同一論にあたる。その場合の思惟は感覚から高度な思考まで含めたものである。そして認識論は反映説ではなく、構成説を用いるので、事物は意識の束として捉えられるとした。

ただし、意識が自由に事物を構成できないのは、原理的に感覚に現れない物自体が意識を制約しているのではないかというのが、カントの特徴で、物自体については人間の物事を何かを判断する理性の限界を超えているとしたのである。もちろんこの事件についても今までの現象から犯人を特定することは不可能であるということだ。

カントの道徳説は、欲望や利害によって動かされる傾向性に従った行為には、道徳性はなく、傾向性を抑制して人としてなすべき義務に従うことに道徳性をもとめるものであった。己の立身出世のための受験勉強は傾向性に基づく行為であり、言われなくても合格することのメリットは分かっているので、合格したければ勉強するし、勉強しろと言われたのでするわけでもないのだ。

それより現代世界や日本の問題を踏まえ、学問することの意義や使命やそこからくる生きがいみたいなものを自覚させることの方が、道徳的な気概が生まれ、学力的にも向上が見込めるのではないかということである。

とやかく議論していても真相解明は進まない。陽一と智子は勇気を出して、事件と関連がありそうな人物に事情を聴くことにした。まず校長の秘書役である嘱託職員の野々上笙子から、事件当日茶筒にヒ素を入れられる可能性は、教職員や生徒、部外者にもあり得たことを確かめた。

そして古文の古谷先生に吉永先生が突然休職になった事情が、歴史教育の偏向問題で、父兄からクレームがあり、それをプライベートをからませることで、休職に追い込まれたことが明確になった。その事情が公になったら困るので、教職員は問題にできなかったこともはっきりし、その内容は教職員には周知のことであったこと、どうやらそれは吉永先生と古谷先生の不倫問題であることも分かった。

二人は明日香村に休職中の吉永先生を訪ねて、休職問題の真相を質した。吉永先生はそれを認めた上で、大学院の博士課程に進むことになっており、辞めさせられたことの恨みから犯行に及んだわけではないことを確かめることができ、彼女については無実の心証を得た。

一方「哲学史で謎を解く」のトピックではフィヒテの主意主義的な哲学が紹介され、彼の救国的な「ドイツ国民に告ぐ」というナポレオン支配下で民族的自覚をもった国民教育が紹介された。それに関連づけて日本の教育危機が、日本の国際的な地位の低下と結びついており、教育の再建が重要であることが論じられていた。

さらに知的直観の立場に立って、思惟と存在、主観と客観、人間と神、人間と自然、男と女などの断絶を乗り越えるシェリング哲学が紹介された。「人間の意識は自然の自己意識である」と立場は、自然を人間の非有機的身体として捉え返す立場につながり、21世紀のネオヒューマニズムにつながっているという評価がなされた。

陽一たちは「アナキスト革命団」に影響を与えた平田慎二に案内されて、榊の自宅周辺を調査した。ヒ素がなくなった坂本病院は榊の自宅のすぐそばにあった。そこの当直の内科医横山葉子と古谷一哉は同じ「河内文化研究会」に属していることが、ＷＥＢ情報からすぐにわかったのである。

また榊の自宅の鍵は旧式なので針金で開けられることも平田の実演で確かめられた。そして榊の妻千恵子が久しぶりに自宅に掃除に戻ってくるところに出くわし、めげることなく頑張っている姿に二人は励まされた。

ミクシィの書き込みの方はいよいよヘーゲル哲学に入っていく、ヘーゲルは、哲学は絶対精神の自己展開であるという立場に立ち、人間理性もその一段階に位置づけることで、人間理性の限界に固執するカント哲学の限界を突破する。そしてその体系を展開していく方法は弁証法である。

存在においてはそれであっても、そのことが自覚できていない即自の段階、そして他者との関係において、自己がどのようなものである自覚させられている対自の段階、そして存在においても自覚においても自己がどのようなものか納得して生きている即且対自の段階、この三段階をたどりつつ、次の段階に高まっていくのである。そしてその発展の原動力は、否定的なものとの矛盾であり、闘争である。この発展の弁証法がヘーゲル哲学の神髄をなすのだ。

事件はいよいよクライマックスになる。進学校の校長会から戻った北津高校の平泉校長は三軒家東の自宅の前で何者かに射殺される。陽一の自宅のすぐ近くである。被害者の息子の秀一とは陽一は幼馴染だったので事件について話し合った。その際に現場を見物に来ていた女性が怪しい微笑をしたので、後をつけると瞬間路地の両側の家の明かりが消え、拉致されて、アパートの一室に監禁された。そして事件から手を引かないと命が危ないと警告された。そして元の路地にもどされた。

謎の女は坂本病院の横山葉子内科医ではないかとひらめいた陽一は、あくる朝早く、八尾の横山内科を見張った。陽一が登校しないのが気になった智子はちょうど釈放されて報告に来た榊先生に陽一が危ないことを伝え、八尾に探りに行ったのではないかと言った。……後はシークレット

**週刊やすいゆたか第**27号12年４月12日号

**単元単位制導入論争、「ちきゅう座」で論議**

「ちきゅう座」というＷＥＢのメディアで私が提案している単元単位制の導入を巡る議論が起こっているので、ここに紹介し、広くこの議論への参加を求めたい。

**学年制を廃止し単位制にせよ**ーやすいゆたか

　大阪市の橋下市長が小中学校にも留年制をということだが、私は学年制そのものを再検討すべきだと思う。もう大量生産時代ではないのだから、すべての科目で一斉に進級という必要はない。各科目、到達目標に達したら次の段階に進むという単元単位制度でいい。

　年に一回の単位認定ではなく、四回か五回ぐらいは行って、単元ごとに単位認定して、進めていく。単元ごとのクラス編成をすればいい。そうすると教師が足らないから、先に進んでしまった生徒は自修でパソコン機器などを使って先に進むようにする。

　単位を落とした生徒は補習で追いつかせる体制もとらなければならない。その際も教育機器を活用すべきだが、マンツーマン体制での指導も必要になってくる。ただその生徒の個性や発達度に合わせて無理のない指導をしないといけない。

　年齢による到達度という固定観念を一度払拭して、各児童生徒の個性や発達度、到達度に合わせた目標を設定して、成長させていくのが本来の教育の在り方である。その意味で留年制の導入は頭が古すぎるのだ。

　なんといっても、学力は国際競争力の土台であり、その観点からも大量生産方式から個別学習重視の個性伸長促進型の教育、あわせて基礎学力重視の教育体制をとって、日本の国民教育の水準を飛躍させなければならない。もっと実験的な試みをすべきだ。

　橋下提案に対して留年可哀想論で抵抗するのでは本末転倒である。到達していないのに次に行かせるのも不合理なら、到達しているのに次に行かせないのも不合理である。

　本人の到達度に合わせた教科毎、単元毎のクラス編成と、教育機器を活用し、マンツーマン指導ができる自修および補習体制を整えること。国造りの基礎にこの教育改革を据えておかなければならない。でないと日本沈没は避けられない。

http://www.chikyuza.net/

**小中学校への単位制導入論への疑問**宇井　宙

　橋下徹大阪市長が小中学校にも留年制を導入すべきと発言したことに関連して、やすい・ゆたか氏は「留年可哀想論で抵抗するのでは本末転倒」であるが、留年制の導入論も「頭が古すぎる」のであり、むしろ学年制そのものを廃止し、「各科目、到達目標に達したら次の段階に進むという単位制度」を導入すべきだ、と主張しておられる）。具体的な制度構想としては、次のような案を挙げておられる。

(a)年に一回の単位認定ではなく、四回か五回ぐらいは行って、単元ごとに単位認定して、進めていく。単元ごとのクラス編成をすればいい。そうすると教師が足らないから、先に進んでしまった生徒は自修でパソコン機器などを使って先に進むようにする。

(b)単位を落とした生徒は補習で追いつかせる体制もとらなければならない。その際も教育機器を活用すべきだが、マンツーマン体制での指導も必要になってくる。ただその生徒の個性や発達度に合わせて無理のない指導をしないといけない。

　やすい氏がそのように主張される根拠は以下のようなものである。

①もう大量生産時代ではないのだから、すべての科目で一斉に進級という必要はない。

②各児童生徒の個性や発達度、到達度に合わせた目標を設定して、成長させていくのが本来の教育の在り方である。

③到達していないのに次に行かせるのも不合理なら、到達しているのに次に行かせないのも不合理である。

④学力は国際競争力の土台であり、その観点からも大量生産方式から個別学習重視の個性伸長促進型の教育、あわせて基礎学力重視の教育体制をとって、日本の国民教育の水準を飛躍させなければならない。

　このように、やすい氏の提案は極めてドラスティックでユニークなものだが、私は賛成できない。以下、その理由を述べる。

　教育社会学者の藤田英典氏によれば、進級や進学を決める制度には課程主義・習得主義と年齢主義・履修主義があるが、前者は年齢に関わりなく、所定の課程を習得したかどうかによって進級・進学を決めるのに対して、年齢主義・履修主義は年齢と通学・履修を条件として進級・進学を決める制度である（『義務教育を問いなおす』ちくま新書、91頁）。

日本では小中高では年齢主義・履修主義を採用しており、大学では課程主義・習得主義を採用している。留年制と単位制はともに課程主義・習得主義の一種であるが、やすい氏の主張される単位制は学年制の廃止とセットになっている分だけ、習得主義を徹底したものと言えるだろう。そこで、単位制導入の是非を考えるうえでは、やすい氏によれば「頭が古すぎる」留年制を採用している欧米諸国の経験が参考になるだろう。

藤田氏によれば、留年制度を採用している国の経験的知見によれば、留年した生徒は、その後も低学力層に留まり続け、自尊心の低下や劣等感の定着、学習意欲のさらなる低下、学業態度・生活態度の悪化などの問題を抱えるようになり、さらには非行やドロップアウトに至るケースもあるうえ、留年者を受け入れるクラスでは教師の指導や学級運営面での困難が増大するという。また家庭環境や地域・階層などの社会的背景が劣位の子どもは留年する確率も高く、教育機会の不平等を拡大することにもなるという。

さらに、ＰＩＳＡやＴＩＭＳＳといった国際学力比較調査によれば、留年制の有無と学力との相関関係は確認されていないという（前掲書255～259頁）。このような経験的知見に基づく留年制の弊害やデメリットは、単位制を導入すれば一層拡大するのではないだろうか。  
　単位制の具体的な帰結を考えても、中には３年程度で小学校を卒業する子どもが出てくる一方で、10年以上かけても卒業できない子どもたちも出てくるのではないだろうか。このような制度が、子どもたちと学校にとっていい影響を及ぼすとは考えにくい。

　また、そもそも義務教育の意義・役割は、すべての子どもに基礎的な学力をつけることにあることは言うまでもないが、それだけに還元されるものではないだろう。

それと並んで、子どもたちが集団生活を通して社会性や共同性や豊かな人間性を育むことにもあるのではないだろうか。  
　そうだとすれば、共通教育の場である義務教育の学校は、一人ひとりの子どもが独立した人格として尊重される場であると同時に、多様な文化的背景や興味・関心を持つ子どもたちが平等に共生する場でもなければならないだろう。  
　学力のみによって児童・生徒を選別する単位制は子どもたちの間に歪んだプライドと劣等感を生み出し、学校を多様な子どもたちが共生する場から、序列化と差別的構造の場に変えてしまう危険性が大きいように思う。

　藤田氏によれば、アメリカの大学関係者の間でときおり使われる表現に「ハッピー・ボトム・クォーター（幸せな低学力層）」という言葉があるそうだ。名門エリート大学でも、学力優秀者ばかりでは、キャンパスライフも学習活動も活発なものにはならず、学力面では多少劣っていても、クラブ活動や各種のイベントでリーダーシップを発揮したり、普段の授業でも活気とユーモラスな雰囲気を作り出したりすることのできる学生の存在が重要だというのである。どのような社会も、その活力と成功は、その場に参加する多様な個性と能力を持つ人々が認め合い、協力・協働してこそ維持され発展する、と言う意味で、ボトム・クォーターが幸せであることが、その社会が成功しているメルクマールである、というのである（同書263頁）。義務教育の学校にも必要かつ有効な視点ではないだろうか。

**教育と研究の場での単位制について**

石塚正英

やすいさんと宇井さんの書き込み、これぞ公共空間メディア「ちきゅう座」が求めているものです。

私は、大学での単位（従量）制に関して利点と欠点を実感しています。個々の単位は落としても学年がないので落第しない。１講座〇〇〇円で履修するわけだから、卒業に必要な単位だけをとればいい。こうした制度は合理的で無駄がないので、学生とその家族にはありがたいものです。大学を「学士」資格取得の場とだけ考える場合、この制度は利点です。

ですが、４年間、留年がないから単位の取りこぼしがあっても時間だけが経過する。そして卒業年度に悲劇が起こります。もともとギリギリの単位数しか登録しないから、つねに単位不足の状況にある学生は多い。

さて、大学で得るものは資格のみではないでしょう。大学で学ぶものは個々の専門（知識・技術）でもなく、それを通じての人間学的教養です。

その高みや深みに入っていくには偶然の出会いが必要です。法学者の三谷太一郎は、かつて『みすず』第276号でつぎのようなこと述べました。歴史研究者は想像力を触発するような史料に遭遇すると、その史料のために、いや、その史料を引用したいがために、一本の作品を構想する、と。  
　これです。遭遇、これが大学での学問研究の基礎です。「遊び」といってもいいでしょう。「道草」といってもいいでしょう。単位制はこの「遭遇」「遊び」「道草」から学生を限りなく遠のかせてしまうのです。ただし、私のように、アラカンすぎても歴史知のフィールドで遊び惚けていると、遊びはもはや仕事になっておりますがね。遊んで生活する、これぞ「偶然」のなせる技！

http://www.chikyuza.net/

**単位制導入論への宇井さんの批判に応える**

やすい・ゆたか

　宇井　宙さんから私の単位制導入論への批判をいただいたので、じっくり検討させていただくことにする。今回は大雑把な形で述べておきたい。まず学校という近代教育制度はもうぼちぼち耐用年数がきたのではないか、イリイチはいみじくも「学校へ通ったら馬鹿になる」と言ったが、それが大変鋭い批評になっているのが現実である。

　宇井さんは私が既成の学校制度を前提に小中学校への単位制導入を考えていると勘違いしておられる。小中高大などというのはおよそナンセンスである。大学生が方程式の初歩を勉強している実態を御存知ないのだろうか。大学という名前があれば大学か、そんなことがいつまでも通用するだろうか。

　単位を修得したら上に行くというのは、当然のことで、それにどれだけの期間がかかるかは個人差があって当然である。

　別に10歳までに微積分が解ける子供がいてもいいし、50歳になってから数学に興味をもって微積分を解けるようになってもいいわけである。実際、今一番勉学意欲があるのは、60歳からの熟年大学の生徒たちである。

　だいたい子供の内は学校で、大人になってから働いて勉強しなくてもよいというのは間違っているので、子供の内から少しは仕事をさせ、大人になってからも学問ができるような制度にしていくべきで、そのための労働時間の制限や学習システムも作っていくべきである。

　宇井さんは留年制の弊害が単位制にしたらひどくなるというが、学年制をなくしてしまえば、得意な科目は大学レベルの学問ができ、不得意な科目は中学レベルの基礎を学べるのだからこれほどありがたいことはないのではないか、そのことについては何も触れておられない。

　歪んだ劣等感やプライドを持つのは、その人が十分に個性を伸長させられないからである。得意な科目はどんどん進め、不得意な科目は基礎をしっかり固めて進めていけば、遅れも取り戻せてくるはずである。

　留年になったりするからコンプレックスになってしまうのだ。それによく理解できていないのに次の単元に進めたりすると、つまずきの原因になることはだれもが分かっていることで、きっちりフォローする体制をつくることで弊害は除ける筈である。

　同年齢でのクラス活動については、地域コミュニティの問題に共同で取り組むホームルームなどを作ったり、サークル活動を義務化するなどできることはいくらてもある。

　私は学校も産業活動をすべきだと考えており、年齢に応じた仕事というのがあれば、それをさせればとよいと思う。

　それに教育力がその国の経済力の基礎であることを考えれば、個性を伸長させ能力を存分に開花させられる教育ができなければ、学力問題は解決できず、「沈みゆく列島」は止められないのではないか、ただ反対というだけでは説得力がない。

　いまや教育は危機的状況にあり、抜本的に一から考え直すべきである。そして単元ごとの単位認定制を実験的にやってみることを奨めたい。

<http://www.chikyuza.net/>　　(次号に続く)

『長編哲学サスペンス　沈みゆく列島―スーパーヒーロー孫明道伝』あらすじ

前篇の『崩れゆく学園』は榊周次の白昼夢ということだったので、そこから再開する。大手門高校出身の作家倉吉良造は、御木本校長に、上海の民主化運動の地下活動家孫智仁の息子孫明道が日本の高校に留学したがっているという、彼は孫文の五世の孫で稀にみる優秀な成績で、しかも日本に父の仕事の関係で住んでいたことがあり日本語も流暢だという。大手門高校の生徒たちに刺激になるので受け入れるようにすすめた。

早速七月初めから孫明道は、大手門高校に登校してきた。なんと彼は上海で榊周次のホームページを勉強しており、『鉄腕アトムは人間か？』も読んでいたのである。きっかけは榊周次の『中国思想史講義』らしい。  
　孫が受けた榊周次の最初の授業は「日本浄土教」で、日本浄土教が、法然に至って、専修念仏になると、既成の経典も修行も教団も寺塔もすべて要らないことになり、ただ「南無阿弥陀仏」だけ唱えればよいことになったので、既成の仏教教団から排撃され、ついには遠流になった話である。

孫は浄土教が慈悲の実践を追及するあまりに仏教自体の自己否定、文化革命に至った話に哲学を感じ、熱心にその意義を論じる生徒たちに感動した。

早速放課後社会科準備室で、孫明道は榊周次や上村陽一、三輪智子と話しているうちに、中国共産党が、改革開放政策のもとで全面的に資本主義的な発展を遂げているにもかかわらず、なぜ共産党の看板を掲げ続けるのかという話になった。

そこからそもそもマルクス主義とは何かという議論になった。疎外論は官僚主義や市場の失敗、国家財政の破綻、環境問題などの批判に使えるという話になり、疎外論の由来や四つの疎外について、検討した。議論が盛り上がったが、下校時間になったので、榊周次は日曜日に自宅に招待して孫君の歓迎会をしようと提案し、マルクスの続きは榊先生の自宅でおおいに論じようということになった。(次号に続く)

**週刊やすいゆたか第**28号12年４月19日号  
**《単元単位制導入をめぐる『ちきゅう座』の論争》  
続き**

**「教育の危機」とは何か**

宇井　宙

やすい・ゆたか氏の単位制導入論に対して疑問を呈したところ、やすい氏から反論を頂戴しました。まずはそのことに御礼申し上げます。

やすい氏はまず、氏の単位制導入論が「既存の学校制度を前提に」しているという私の勘違いを指摘して下さった。やすい氏が、「大阪市の橋下市長が小中学校にも留年制をということだが、私は学年制そのものを再検討すべきだと思う」と書かれていたので、私はてっきり小中学校の「学年制そのものを再検討」し、単位制を導入すべしという主張だと勘違いしたのである。

やむを得ない勘違いであったと思うが、やすい氏の単位制導入論は、学年制の廃止論とセットになっているだけでなく、「小中高大などというのはおよそナンセンスである」という、よりラディカルな教育改革思想が前提となっていることがわかった。しかし、そうなると、例えば、やすい氏はそもそも義務教育をどう考えておられるのか、といった疑問も生じる。

やすい氏が具体的にどのような教育改革構想をお持ちであるのか（例えば、義務教育制度自体を廃止すべきであるといった主張なのか）、今なお私にはよくわからないので、それに関してコメントすることはできないが、私が単位制導入論に疑問を表明したのは、あくまで義務教育段階である小中学校に導入することに対してであった。大学は現に単位制であるが、それに対して私は反対ではない。高校については、現時点ではまだ考えが固まっていないが、あるいはやすい氏が主張されるような単位制の高校が（一部に）あってもいいのかもしれない。

　いずれにせよ、やすい氏が学年制の廃止や小中高大といった学制の根本的変更といったラディカルな教育改革を提唱しておられるのは、「いまや教育は危機的状況にあり」、抜本的な教育改革を行わなければ「日本沈没は避けられない」との認識が前提になっていることはおそらく間違いないだろう。

では、やすい氏がお考えになっている「教育の危機」とは一体何なのであろうか？　この点も詳しくはわからないが、その一つに、「学力の低下」があることは間違いないだろう。やすい氏は３月３日のエッセイ「哲学ファンタジーが反響を呼ぶ－大学講義のあいまに（1）」の中でも「学力低下が深刻になり、倫理学や哲学の講義も旧態依然の概論的な講義では、内容を理解させ、集中させるのは極めて困難になってきている」と述べておられたし、前回（４月９日）の論考では「大学生が方程式の初歩を勉強している実態を御存知ないのだろうか」と書いておられた。

１カ月余り前には、大学生の４人に１人が「平均」の意味を理解していないというニュースが流れたばかりだし、私もつい先日、大学教員をしている知人から、その人の教えている大学では4年生の英語の授業で現在完了形を教えている、といった話を聞いたばかりである。だから、大学生の学力が低下しているという実態自体は、私には意外でもなんでもないし、それ自体は確かに問題ではあるにしても「日本沈没は避けられない」というほどの大問題とは思っていない。

そうなった原因ははっきりしていると思う。ひとつは、80年代以降始まった「ゆとり教育」の推進、とりわけ92年から始まった「学校スリム化」改革＝「週五日制」の導入に伴う授業時間と授業内容の削減である。教育社会学者の苅谷剛彦氏が『教育改革の幻想』（ちくま新書、二〇〇二年）の第三章で、様々な統計資料を用いて、一九七〇年代から二〇〇〇年にかけて中学生、高校生、大学生の勉強時間がいかに減少してきているかを実証しているので、それらを見ても、これで学力が低下しないはずはないことがわかる。もうひとつは、少子化の進展による大学全入時代の到来により、大学入試科目の削減、推薦入試やＡＯ入試の導入・拡大による大学入学の容易化により受験生がますます勉強しなくなっているからである。

　実は大学生の学力低下論は90年代の末からマスコミを賑わせていた。『分数ができない大学生』という本が話題になったのは一九九九年である。そのため、完全学校週五日制が始まる直前の二〇〇二年１月には遠山敦子文科相が「確かな学力の向上のための二〇〇二アピール『学びのすすめ』」を発表し、学力重視方針への転換が打ち出され、翌03年には実施されたばかりの学習指導要領が一部改訂され、05年からは02年の新学習指導要領で削減された教科書の内容の多くが復活した。

ところが、「ゆとり教育」＝「新学力観」の建前は依然として維持したまま、「個性と能力に応じた教育」を掲げる新自由主義的改革路線の下、習熟度別学習、学校選択制、エリート的な中高一貫校の普及といった「強者の論理」に基づく教育「改革」が同時並行で推進されているのが現状である。

現在の「教育の危機」を招いている元凶は、専門家や現場の教師の知見や実践を無視した政治主導の30年に及ぶ強引で歪んだ「教育改革」の押し付けであった（この間の歪んだ「教育改革」の混乱ぶりを概観するには藤田英典『義務教育を問いなおす』を参照されたい）。それによって、国際的には相対的に優れた水準にあった日本の教育制度が破壊されてきたのである。やすい氏は、「ただ反対というだけでは説得力がない」と言われるが、明らかな改悪に対しては、改悪をやめよ（＝「ただ反対」）というのは正当な対案であると思う。

　理想の教育論を述べることは意義のあることだが、教育の実態をみる「である論」を踏まえた「べき論」でなければ、理想が理想のまま空転してしまう恐れがあるのではないだろうか。

http://www.chikyuza.net/ pinion0851 :120409〕

**義務教育論と単元単位制の導入についてーー宇井宙さんの再反論への応答ー**

**やすいゆたか**

宇井宙さんの再反論を早速いただき、議論が弁証法的に発展しつつあるので、非常に喜んでおります。

　まず宇井さんは、単元単位制の義務教育への導入に限って反対だということらしい。義務教育をやすいはどう考えるかということだが、国民全体に学ぶ権利を与え、国民全体の文化的あるいは知的モラル的水準を引き上げることが、近代化の基礎だった。それで導入されたわけで、その進歩的意義は大いに評価されるべきだと思う。

　では単元単位制を義務教育に導入したらどんな弊害が生じるというのか、宇井さんによれば、中には小学校３年で卒業してしまう児童もいれば、10年たってもできない生徒がでてしまうということである。

　しかし逆に言えば、既成の制度では、中学内容を学ばせるべき相手に ３年間も習得し終わったことを学び直させていることになり、不能率極まりないので、その不満が能力別クラス編成や学校選抜制といった新自由主義的な教育改革案につけこまれることになっている。

　また10年たっても小学校を卒業できない児童のフォローの体制も留年や再履修や教育機器による自修およびマンツーマン指導などのケアが体制的に保障されないことで、既成の制度では小学校の内容を修得しないまま中学校へ進学させてしまっているので、中学校で中学校の教育が十分できない結果を生んでいるということである。

　既成の学校制度にはそのような欠陥があるので、学力の伸長ができなかったり、遅れた児童・生徒に対するフォローができていないことで、問題が山積しているのである。それをどうするかという対案を宇井さんは示されるべきであろう。

　そもそも小中高大という既成の学校制度を前提に教育改革を語るべき段階ではない。冷戦終焉後、いわゆる近代は終焉したのであり、グローバル化の時代に対応した新しい教育体系をいかに作り直すべきかという観点で論じるべきで、今は実験的にいろんな制度を行ってその効果を確かめるべき段階である。

　宇井さんは義務教育は学力だけが目的でないことを強調され、その観点から単元単位制に反対されている。

「そもそも義務教育の意義・役割は、すべての子どもに基礎的な学力をつけることにあることは言うまでもないが、それだけに還元されるものではないだろう。それと並んで、子どもたちが集団生活を通して社会性や共同性や豊かな人間性を育むことにもあるのではないだろうか。

　そうだとすれば、共通教育の場である義務教育の学校は、一人ひとりの子どもが独立した人格として尊重される場であると同時に、多様な文化的背景や興味・関心を持つ子どもたちが平等に共生する場でもなければならないだろう。

　学力のみによって児童・生徒を選別する単位制は子どもたちの間に歪んだプライドと劣等感を生み出し、学校を多様な子どもたちが共生する場から、序列化と差別的構造の場に変えてしまう危険性が大きいように思う。」

　単元単位制はなにも学力で選抜しようというのではない。多くの学問には体系性というものがあり、順を追って展開していくものだから、そういう学科では順番に履修すればいいというだけである。マスターしたら次に進むということである。だから同じクラスに習得の速度の速い遅いの差のある生徒がいるのである。

　序列化や差別構造というのは、学校に格差をつけたり、教える内容を濃くしたり薄くしたりして格差に応じた教育にするからである。単元単位制というのは、それまでの単元はしっかりマスターしているので、標準的なその単元の教育が行えるメリットがある。学校格差も必要ないので、入学試験も廃止できる。

　また宇井さんには同年齢教育への執着があるようだが、学科とは別にホームルームを地域別に作って、様々な地域活動を体験させ自主性を育て、チームワークを覚えさせ、社会性を涵養させるべきだと思う。人数が確保できなければ、必ずしも同年齢にこだわらなくても、年齢の近い児童・生徒のホームルームにすればいいのではないか。

　またサークル活動もきちんと時間的に保障し、仲間づくりや個性の発見、文化的な自己実現活動を学科と並んで重視すべきであろう。

　義務教育制度そのものは、すでに発展解消されているに近い。そもそも勉強は一生すべきであり、社会に貢献する仕事も幼い頃からさせるべきである。したがって学校自体が産業活動も担って、地域社会に貢献し、できれば学費を無料にするとか、独立採算を目指すべきである。

　また企業も教育システムを組み込んで、学習時間を従業員に保障すべきであり、地域も文化講座などで、主婦や熟年世代の学習権を保障すべきである。そして学校施設も地域や企業にも活用させるべきであることはいうまでもない。そして忘れた内容については、年齢は問わず、自由に再履修できるようにすべきであろう。そのようにすれば、歪んだプライドや劣等感など生じる余地はないと思うがどうだろう。

　学力低下問題の存在そのものは認めておられ、平均の意味が分からない分数計算ができない等の現状も理解しておられるが、それは日本沈没につながるほどの問題ではないと受け止められておられるようである。その根拠が説明されておられないので、納得いかないところである。

　日本はアジア諸国と比較して賃金水準が高いなどコスト面で競争力が弱いので、技術水準、文化水準の高さを利用して高付加価値商品で他国の追随を許さないようにして棲み分けていくしかないということが70年代、80年代には盛んに言われていた。しかし90年代以降はバブルがはじけてから、技術革新が進まず、アジア諸国からの低価格商品の流入でデフレ不況を続き空洞化が進んできたことは周知のことである。

　その間特に教育の荒廃が進み学力低下が深刻化している。ゆとり教育の導入にも問題があるが、それ以前に学校制度の不能率を座視したままで、高付加価値商品で棲み分けることなど不可能ではないのか、それが日本の沈没の原因だというのは既に常識ではないかと考えるがどうだろう。

　もちろん産業の技術水準と教育効率は直接相関関係を計算することはできないが、政府は財政支出を積み上げて赤字を増やしても景気を回復させようとしても、労働力の飛躍的な質的向上が図られなければ、効果は期待できない。そのための教育という重要な基礎は忘れてはならないだろう。

　一〇〇〇兆円を超える財政赤字で国民一人当たり一〇〇〇万円の借金を抱えている、我々低所得者には気が遠くなるような話だ。日本国民は沢山資産をもっているから大丈夫というが、その資産も国家の信用に支えられているのだ。国家の破綻は目前に迫っているのではないか、宇井さんは、国家の自己疎外の深刻さに気付かれていないようで、それはどうしてか不思議である。

　　　　　　　　　　　　　　　　次号に続く

**『長編哲学サスペンス　沈みゆく列島ースーパーヒーロー孫明道伝』あらすじ続き**

　７月３日日曜日に榊周次の南住吉の自宅で、孫明道の歓迎会が上村陽一と三輪智子も呼んで開催された。そこで孫は、光Lightと命Lifeと愛Loveを信仰する三Ｌ教の起ち上げを提案したが、榊によると光・命・愛はだれもが信仰していて、その意味で全ての人が三Ｌ教徒だが、教祖や教義体系や教団や儀礼などを決めてしまうと新興宗教になってしまうといって応じなかった。陽一も智子も受験生だし教団活動など乗り気ではない。  
　孫は三Ｌ教を広めることで、民主革命の支持基盤を形成しようという狙いがあるらしく、まず日本で留学中に青年を組織しようと考えているらしい。  
　そしてマルクスの続きを議論した。『フォイエルバッハ・テーゼ』に関連してマルクスの実践哲学や人間論、唯物史観と科学的社会主義、労働価値説と剰余価値理論と議論が進み、中国共産党は中国で資本主義の発展を図っているのにどうして共産党の看板を下ろさないのかという疑問を話し合った。それは今は資本主義化の時期だが、やがて生産力の発展によって共産主義に移ると見なしているからではないか、孫は説明した。その思想的根拠を大同思想の伝統に求められるかもしれないと言った。

　「物化・物象化・物神崇拝」については、後期マルクスは、人間と事物の区別に固執して、社会的諸事物が価値となったり、価値を生んだりすることを倒錯として批判したために、かえってつきもの信仰に陥ったり、経済の説明がうまくいかなくなっていると榊は指摘、そのことに気付いたのが、榊の学界へのデビューだったが、かえって孤立を招いてしまったという。そして若きマルクスの自然を人間の非有機的な身体とする発想が榊が提唱するネオヒューマニズムの淵源だという。

　孫は翌日から、早朝に登校し、太極拳をし、自作の歌を披露し、歌唱指導をするというパフォーマンスを行い仲間づくりに乗り出した。孫は一年生、二年生を対象にして、教え合いの学習サークルを結成した。

　中学生の時にトップクラスだったのに、高校に来てから超難問の定期試験で三十点未満の欠点を頂戴する生徒がけっこう多いので、基礎・標準・発展をきちんと踏まえて噛み砕いて説明する孫の教え方で、目から鱗がとれたように難問が解けるようになった生徒が多く、たちまち学習サークルは三十名の大台に乗った。

　その際、光・命・愛を信じるという三Ｌの教義で心の一体感をもった生徒たちは今まで、自分の殻に閉じこもって、教え合いなどできなかったのだが、互いに親身になって教え合うようになり、そのことでますます学力が向上するようになったのである。　　　　　　　  
　　　　　　　　　　　　　　　**次号に続く**

**週刊やすいゆたか第29**号12年４月26日号  
**《単元単位制導入をめぐる『ちきゅう座』の論争》  
続き  
単元単位制導入に関するＱ＆Ａ―大学講義のあいまに（８）　　　　　　　　　やすいゆたか**

ある大学の教職倫理学の授業で単元単位制についての「ちきゅう座」記事を紹介したところ、以下のような質問がコメント用紙に書かれて応答したので、「ちきゅう座」の読者にも一応参考にしていただけたらと思う。

**問　単元単位制は確かにすごく効率の良いシステムだと思うし、学力も上がると思います。でも、日本人の性格から考えて、イジメにつながるのではないでしょうか、賛成できません。**

答　イジメる人は何でもイジメのネタにしてしまいますから、早く進んだり、なかなかついてこれなくて、単元が遅れたりするとイジメにあうことは考えられます。しかし現在でも、同じ単元を勉強していて、成績が良すぎたり、悪かったりするとイジメられています。

イジメが生じないようにするにはどうすればよいかを考えるべきで、イジメが生じるから採用しないとなると、改革しなければならないのに、改革できないということになります。

たとえば単元を一通り、習い終えたところで定期試験の前に復習テストを実施し、分からなかった箇所を板書させて、分かった生徒に説明させるとかの教え合いを授業に取り入れて、連帯感を持たせ、できるだけ皆が達成して次にいけるようにするとか工夫すれば、イジメは減ると思います。

**問　単元単位制は学力の点においてはとてもいいと思いますが、学校の役割には人格の完成という目的もあり、心においての成長も必要とされています。その二つをどのようなバランスや方法で行っていけばいいのかがこれからの課題ではないでしょうか？**

答　学力と人格のバランスが大切だというのは全く同感です。単元単位制にすれば人格の完成にどのような支障が出ると予想されているのでしょうか？おそらく達成速度に差があることから、おごりや妬みが生じて人格をゆがめるということでしょう。

それなら、習熟度でクラス分けをしたり、学区を拡大して学校格差を極端にしたりしてきましたが、差は歴然とされているのでおごりや妬みが生じ、そこからさまざまな問題が噴出し、教育危機になっているのが現状ではないでしょうか。

単元単位制にすれば、到達度の同じ生徒のクラスになるので学級格差も学校格差も必要なく、入学試験なども要りません。そこから生じる人格的な歪みが防げるのではないでしょうか？

　そして得意科目ではどんどん上に行けて、自分の個性や特性を伸長させ、才能を発見できるわけです。また不得意科目では繰り返し基礎を学びなおして確かな実力をつけられるということで、コンプレックスの解消にもなるのではないでしょうか？

**問　今、現在の小・中学生に「自身の向き不向きや得意・不得意」を把握して、その上で自身の方向性を自己決定できるという論拠がないのならば、単元単位制の導入は時期尚早ではないでしょうか？**

答　大学で履修登録で悩んでおられるので、小中学生に単位制は無理と考えられたのではないでしょうか？小中学生に自由に科目選択をさせようという発想ではありません。単元目標を達成したら、次の単元にいけるということで、達成しなかったら、補習や自修、マンツーマン指導などで遅れを取り戻させようということです。ですから精神的に未成熟だから無理や混乱が生じるということはありません。

http://www.chikyuza.net/opinion0866 :120420〕

**日本の教育の根本的問題点**

**宇井　宙（ういひろし）**

　戦後日本の教育制度には、それぞれの時代ごとに特有な問題や課題があった。一九五〇年代末から七〇年代までは、「過度の受験競争＝受験戦争」と学歴社会が大きな問題であった。そのため、一九八〇年に改訂された学習指導要領は「ゆとりと充実」をスローガンに掲げ、学習内容と時間を削減する「ゆとり教育」がスタートした。

一方、七〇年代後半から八〇年代前半にかけて、校内暴力の多発＝「荒れる学校」が問題化した。八〇年代半ばには、中曽根内閣の下で設置された臨時教育審議会（臨教審）が、新自由主義と国家主義に基づく「改革」案を答申として提出したが、これらが具体化するのは九〇年代以降のことである。

八〇年代後半になると、校内暴力は下火になったが、代わっていじめ問題と不登校問題がマスコミで騒がれるようになった。

九二年改訂の学習指導要領では「自ら学ぶ意欲や思考力」を重視する「新学力観」を掲げ、月１回の学校五日制が始まり、九五年から月２回、二〇〇二年から完全五日制に移行した。

九〇年代半ば以降、政財界や一部評論家の間で「教育の自由化」論が高まり、九〇年代末以降、学校教育法の改正や文部省通達等によって中高一貫校や学校選択制が次第に広まった。二〇〇〇年代に入る頃から学力低下問題がマスコミ等で騒がれるようになり、二〇〇〇年代前半には全国の小中学校で習熟度別（能力別）学習が爆発的に広まった。そして、小泉政権下で進められた構造改革による格差社会が教育における格差を一層拡大する結果となった。

二〇〇六年９月に国家主義と新自由主義のイデオロギーに凝り固まった安倍晋三内閣が発足すると、翌10月に教育再生会議を設置し、12月には「改正」教育基本法を強行採決によって成立させ、〇七年６月には教育関連三法（学校教育法、地方教育行政法、教育職員免許法）をこれまた強行採決によって「改正」させた。これにより、文科省の教育統制権が強化され、副校長・主幹教諭・指導教諭といった中間管理職が導入され、学校評価・情報提供の義務化・画一化が図られ、教員免許更新制が導入されるなど、管理主義的・国家主義的改悪が矢継ぎ早に行われた。

また東京都では一九九九年以降の石原都政下で、大阪では二〇〇八年以降の橋下府政（二〇一一年11月以降、松井知事・橋本市長体制）下で、教育現場における日の丸・君が代の猛烈な強制が推し進められており、良心を持つ教員が居場所をなくすような事態にまで進展している。

このように戦後日本の教育制度・教育環境は、その時代時代の問題や課題を抱えていたのであるが、九〇年代後半から始まり、二〇〇〇年代になってからは猛烈な勢いで推進されつつある政治主導の新自由主義的かつ国家主義的「教育改革」はそれ以前とはケタ違いの問題を生じさせており、それによって教育現場は窒息寸前の末期的状況に陥っている、というのが私の現状認識である。  
　教育問題には門外漢の私が、教育問題に口を挟まざるを得ない心境に至ったのも、このような危機感ゆえである。そのため、このような危険で歪んだ「教育改革」を一刻も早くやめさせることが危急の課題であるとの切迫感を私は抱いているのであるが、もちろん、そのような「改革」を阻止しされさえすれば、すべての問題が解消し、万事めでたしめでたしとなる、などと能天気なことを考えているわけではない。  
　このような新自由主義的・国家主義的「改革」が始める以前の日本の教育制度にも極めて重大な問題があった、と私は考えている。

しかし残念ながら、私にはその問題を指摘することはできるが、その処方箋を示すことはできない。問題が根深すぎて、明快な解決策を提示することができないのである。  
　そのため私は、これまであえてその問題に触れないできたのだが、目下の新自由主義的かつ国家主義的「教育改革」以前の教育には何の問題もなかったと思っているのだろうとの誤解を払拭するため、ここであえて、日本（だけではないとは思うが）の教育における根本的な問題と私が考えている事柄を提起することにする。

日本の戦後教育、というより、実は明治時代以来一貫して日本の教育を貫いている根本的な問題とは点数競争主義＝序列主義である。これこそが日本の子どもたちを不幸にし、本質的にバカなエリートを生み出し、日本社会を歪めている根本的な元凶である、と私は思う。  
　序列主義とは、テストの点数や偏差値に代表される数値（これには例えば、東大合格者数や合格率といったものも含まれる）によって生徒や学校の優劣をつけて序列化しようとする思想のことであるが、この序列主義は学校だけでなく、日本社会のあらゆるところに浸透している。特に、序列主義の「勝者」である「エリート」層ほど序列主義的発想にとりつかれている。  
　ある「エリート」大学の法学部生の多くは、自分の進路さえ序列主義的発想に基づいて決めようとする。すなわち、１番法曹（その中でも１番裁判官、２番検察官、３番弁護士となる）、２番国家公務員、３番（１番にも２番にもなれない者が仕方なく選ぶ選択肢）民間企業…といった愚かしくも滑稽な価値観に浸りきっているのである。

この序列主義を早い時期から批判していたのが、数学者の遠山啓氏である。氏が一九七六年に出版された『競争原理を超えて――ひとりひとりを生かす教育』（太郎次郎社）を読むと、非常に共感する点が多い。遠山氏は明治以来、日本の教育を支配してきた原理は国家主義と序列主義であるが、より根本的なのは序列主義である、と指摘しているが、私も全くその通りだと思う。  
　人間というものは元来、きわめて個性的なものであるから、本来、比較不能な存在である。ニュートンとシェークスピアのどちらが偉いかなどと問うのはナンセンスである。ところが、この二人に同じ試験を受けさせて、（例えば）「ニュートンの方が８点エライ」などとやっているのが、今の序列主義教育なのである。

しかも序列主義教育においては、国語・数学・英語など異なる科目の合計点で争われることになっているが、このような異なる科目の合計点にどのような意味があるのだろうか。足し算は同種のものでしか行えない、というのは算数の常識である。財布１つと150円とリンゴ３個があります。全部でいくらでしょう？  
　１＋150＋３＝154などという「答え」に何の意味もないことは小学生でもわかるだろう。牛１頭と犬３匹と蟻20匹なら、皆生き物だから足し算してもいい、などとは言えないだろう。ところが、異なる科目の総得点で争われるテストでいい成績を収めるためには、どれもそつなくこなすタイプが「優秀」とされることになる。そのため、ひとつの問題を徹底的に考えたり、既成の枠組みに捉われないような独創的な生徒は、決して「優等生」にはなれず、むしろ劣等生とされる可能性が高い。

さらに、序列主義＝テスト点数主義教育においては、「正解」はあらかじめ決まっていることになっているから、その「正解」に早く到達したものが勝者となる。それゆえ、「正解」を疑ったり、他にも答えがあるのではないかと考えたり、自分の頭で徹底的に考え抜くことはすべて点取り競争においては不利になるので、権威主義的で他律的な人間ほど競争に勝ち残ってエリートになる確率が高い。自律的・個性的・批判的思考はすべて序列主義においてはマイナス要因となるのである。

官僚や財界人など日本のエリートに本質的なバカが多いのは、こうした序列主義教育の産物なのである。序列主義教育の勝者は損得勘定が得意で、他人を犠牲にしてでも自分の得になることはするが、損をするようなことは決してしない、というタイプが多い。また、「エリート村」の村人は、自律的・批判的思考は苦手なので、物事を判断する基準は「村人の多数派が支持すること」という「村の論理」である。しかも彼らはエリート意識を持っているので、たとえ彼らの意見が国民の中の少数派であっても、「バカな大衆の言うことなど聞く必要はない」と思っている傲慢無知な連中である。そのような連中が今、原発再稼働へと遮二無二突っ走っているのである。  
　やすい・ゆたかさんは、日本の学力問題を解決しなければグローバル化時代に対応できず、日本経済は衰退すると心配されている。確かにそのような問題もあるかもしれないが、私には、日本のエリートたちが今現在、日本を破滅させようとしていることの方がはるかに心配である。

さて、遠山氏の『競争原理を超えて』を読むと、序列主義批判というその基本的主張に私は大賛成であるし、「子どもの多くは勉強が好きで好きで仕方がないというものではない」という私の意見は、あくまで現在の教育制度を前提にした偏見にすぎないのではないかと反省させられる。  
 ただ、遠山氏の示される処方箋を見ると、必ずしもすべてに賛同できるわけではない。特に、詰め込み教育の弊害を是正するため、教育の量を減らして質を高める、という提言は、無惨な失敗に終わった「新しい学力観」に基づく「ゆとり教育」の思想と相通じるものがあるように思う  
 もちろん、実際に導入された「ゆとり教育」は、遠山氏の考えるものとは大いに違っていた可能性もあるし、「ゆとり教育」の失敗の原因は必ずしも「新しい学力観」自体の間違いにあるとは言えないかもしれない。ただ、いずれにしても、序列主義教育を克服するための処方箋を示すのは困難だと痛感する。

　私は、年齢主義（履修主義）に基づく義務教育制度は絶対に維持すべきだと考える点で、やすいさんとは意見を異にするが、人は生涯いつでも好きなときに学習できるような社会システムを構築すべきであるというやすいさんのご意見には共感するところが多い。ただ、そのためには学校を変えるだけではダメで、企業のあり方そのものを変えていかなければならないのが難しいところである。  
 大学のあるべき姿に限って言えば、やすいさんの提言は非常に参考になる。単元単位制では細かすぎると思うので、私は科目単位制でよいと思うが、入学試験も卒業制度も廃止して大学を社会に完全に開放し、受講したい人は全国どこの大学でも好きな科目を受講できるようにし、修了試験に合格すれば単位を取得できるようにし、一定の科目と単位を取得した人に学士号を授与するようにすればいいのではないだろうか。ただ、これも具体的に考え出すといろいろ細かな問題点は出てくるのだが。

http://www.chikyuza.net/opinion0868 :120420〕

**『沈みゆく列島』あらすじ続き**

夏休み期間中孫明道たちの学習会は日曜日以外必ず開くことにし、三Ｌ教の提唱者である榊周次を招いて、現代哲学の連続講座を開催することになった。それで学習会の名前が「三Ｌ学習会」となり、学内サークルとして校長からも認知を受けた。  
　講義はマルクス主義、実存主義、プラグマティズムの三大思想だが、マルクス主義は既に陽一・智子・明道との対話で消化済みなので、実存主義の８月２日のキルケゴールから書いてある。榊先生は、キルケゴールの大地震、実存の三段階、死に至る病など、キルケゴールの絶望の意味をどう受け止めて我々の生き方を問い直すのかを語った。

明道はＪＲ野田駅近くの華商王法燈が管理している法燈館に間借りしていた。隣に引っ越して来たばかりの大阪市立大学に九月から編入予定の鄧玉泉が、差し入れのケーキなどをもってやってきては話し込んでいく。彼女は領事館員の娘なので、密偵かもしれないと警戒していた。

　三Ｌ学習会で学力向上のノウハウを研究し、日本沈没を防ごうとしていると話すと、玉泉は、日本の停滞は仕方ないから、世界の工場である中国に働きに来て、日本は風光明媚だし伝統文化もよく保存されているので、観光産業で栄えればいいと言った。そして停滞を脱却するには中国人が大躍進の失敗と文革体験で味わったような地獄を見ないと無理だという。明道は大震災と原発事故で日本人も目覚め始めていると指摘した。**続く**

**週刊やすいゆたか第30**号12年５月３日号  
**単元単位制導入は緊急の課題である  
 やすいゆたか**

**１「国家の自己疎外」とは何か？**

このターム（用語）はまだ一般化していないかもしれない。私の提唱しているネオヒューマニズムの人間観は、ホッブズ『リヴァイアサン』の国家を巨大な人工機械人間と捉える人間観を継承している。  
　人間を意志決定中枢を持ち、自己保存や発展を図る組織体と捉える。そこには個々の人体だけでなく、自律的な組織体や国家も含まれるのである。

　だから国家も生きた人間として自己の目的実現に向けて行動する。国家は国家自体の安定、自己保存、発展のために行動するけれど、そのことによってかえって自己の存立の基盤を掘り崩して国家存亡の危地に自らを追いやることがある。これが国家の自己疎外である。

　開国以来、富国強兵によって欧米列強の植民地化を防ごうとしたが、その結果朝鮮半島の覇権を清国・ロシアと争って獲得し、さらに満蒙も血で贖った利権ができてしまい、それを死守し、さらに拡大しようとして、墓穴を掘ってしまった。　これは典型的な国家の自己疎外である。  
　今日の財政破綻も国家の自己疎外である。不況に際して国家が財政を投じて景気刺激を行えば、投資乗数倍の所得増大が見込めるはずであった。しかし今や経済はグローバル化しており、安価な商品が流入するので、財政投資の効果はほとんどない。

　これまでのような財政政策で景気対策を行っていけば、財政赤字はますます膨れ上がるだけである。自分で自分の首を絞めているようなものである。  
　ではどうすれば国内市場を拡大できるのか、それは大胆な労働開国を行うということである。

　労働開国で日本の若者にとってはライバルの増加で就職難はますます厳しくなるという面があるが、日本経済が上向きにならない限り、仕事もないので、プラス面もあるのだ。  
　労働開国は労働輸出とセットであり、日本の若者も活躍の場所を世界に求め「人間到る処青山あり」の精神をもつべきである。   
　　　**２大競争時代の教育改革の必要**

　海外からのやってくる若者との競争を考えても、教育の効率化は極めて切実な若者にとっての要請である。グローバル化の時代にはまさしく大競争時代の到来であるということは、すでに八十年代からやかましく言われていたと記憶している。

　単元単位制を導入すると、年齢差のある者が同じクラスを構成することで生じるストレスを解決する方法を講じていかなければならない。それは地域活動やボランティア活動などで同年齢クラスを作って補うなども有効な方法だろう。また年齢差があるもの同士が教え合うメリットを活かすというのも大切である。

　大競争時代に生き抜ける人材育成が時代の要請なら、それに対応できない教育では、若者たちに大きなストレスになり、かえって教育に対する不満が鬱積することになるのではないか、そのためには格差付教育に反対しつつ、もっとも効率的に教育目的を達成できる単元単位制の導入こそ急がなければならない。   
　　　**３単元単位制のテスト作成**

　急ぐと言っても、拙速では失敗するので、教育実験のやりやすいところ、効果の上がりやすいところから採用していくことが賢明だろう。単元単位制にすると成績評価に客観性が求められる、試験制度を慎重に吟味しないと逆効果になる。

　担当した単元のテストは当然担当した者が試験問題を作成するのだが、自分のクラスに自分の作成した問題でテストすると、どうしても担当者は合格者をたくさん出そうとして、不正が生じやすい。

　各担当者が作成した問題は、共通テストの組織で編集し直されて、同レベルの難易度の何種類かから担当者が選択できるようにすれば、客観性が保証されるだろう。採点も全くつながりのないクラスの答案を採点するようにするなど厳正なものにする。  
 　　　　**４その他の問題点**

　科目単位制ではなく、単元単位制にするのはフォロー次第で早期に追いつけるからである。年間の成績でやり直しとなると落第として挫折感が強く、なかなか遅れを取り戻せない。

　授業を録画してＷＥＢで送信することを制度化する必要があるだろう。生徒は通学地域が限られるので、相性のいい先生に出会えるとは限らないからである。教師は互いに参考にでき学び合えるので、質的向上が目指せる。

　たとえば４時間は学校の先生の単元の授業を取らなければならないとし、２時間は自修ルームで進んだ単元を勉強したり、遅れた単元の指導を受けたりするようにする。

　もちろんその生徒の学習進度によってはその割合は柔軟に考えればよい。小中高大の区別は次第に不必要になっていくので、一つの校舎に初歩から高度なゼミナールや先端講義まで同居するようになるのが理想である。

　しかしそれでは巨大化しすぎるので、実際にはやはり進度にあった小学校や中・高校や大学のいずれかにホームを置いて、進んでいるのは上の学校にでかけていき、遅れているのは、下の学校にでかけるか、そこで基礎の指導を受けるかになる。

　宇井宙さんは、新自由主義的改革による教育破壊や学力低下を批判されているが、新自由主義的改革をやめさせても、学校の荒廃は依然残るとされ、その対策は考え付かないとされる。それでは労働開国をしたら、日本の教育を受けた若者たちは、十分な教育を受けてないことになり、ますます就職は困難になるのではないか。

　労働開国をしないで、どのように少子高齢化による社会保障費の負担増をささえられるのだろうか。やはり学校教育を抜本的に改革し、国際競争力にある人材育成を図らざるを得ないだろう。それでも宇井宙さんは、義務教育期間だけは学力偏重ではだめなので、単元単位制導入は避けるべきだということらしい。

　しかしそんなやり方では中途半端になってしまう。同年齢教育で９年間過ごしたために、高校からの単元単位制導入はかえって劣等感を刺激し、ストレスから反発が強くなるのではないか。とはいえ現実的には抵抗が強いので、まずは一部で実験的に導入して効果を確かめ、弊害を防ぐ対策を立ててから広げていくようにするしかない。

　宇井さんは、義務教育への単元単位制導入が駄目なら何らかの、格差教育、受験教育を克服し、しかも大競争時代に対応できる対案を示されない限り、この論議は埒が明かないことになる。

　だから宇井さんも、ここらで義務教育への単元単位制導入に反対は撤回されて、義務教育で実施する場合は、どのようにして弊害を防ぐかという観点から議論を展開されるべきではないだろうか。

**『沈みゆく列島』続き**

　８月３日朝のミーティングで鄧玉泉の参加が了承され、午後から加わった。３時からの榊の講義はニーチェだった。人間の限界に挑戦して〈超人〉をめざして生きることに人間として尊厳があるとニーチェは訴えた。現在の日本はその正反対の末人の国になってしまっていないかと問いかけた。それで孫は鄧玉泉との昨夜の対話を紹介し、  
鄧玉泉に挨拶させた。  
　彼女はこの学習会は奇跡に近いので、そう広がらないだろうと言い、何も最先端にこだわる必要はなく、日本には食材や観光と文化の面で素晴らしい資源があり、観光立国を目指せば十分豊かな国を保てる、自分は将来日本観光の事業をやっていきたいと抱負を語った。

　その日は孫明道と鄧玉泉は一緒に帰宅する。その夜深夜に物音があり、翌４日朝玉泉は何者かに拉致されているのが分かった。明道は学校で事情聴取を受けた。  
　４日の榊の講義はヤスパースで機械と大衆の時代としての現代、惰性態として流行に生きがちだが、だれしも乗り越えることも避けることもできない限界状況（死・苦悩・罪責・争い）に直面している。限界状況に真摯に立ち向かってこそ、乗り越え不能な壁の向こうに超越者つまり神の存在を感じることができる。  
　限界状況から逃避しようとするのを互いに〈愛しながらの戦い〉で立ち向かわせるところに実存的な交わりがある。  
　そして存在それ自身である包括者と我々がそれである包括者についても語り、実存哲学は単なる主観主義ではなく、主客合一を目指す哲学でもあることを確かめた。  
　４時に鄧玉泉の父鄧王林と名乗る男が現れ、事情を聴かせてほしいと中国領事館への同行を求められて孫明道は連れて行かれたが、これも実は拉致だったのである。それに気付かず、榊はハイデッガーの講義に入った。  
　人間は今ここにあるという現存在を自覚し、世界・内・存在として世界のつながりの中に存在する。それは従って、用在として役割をこなさなければならないが、役割をこなしていれば、流行に合わせ、他人と協調していればよい。しかしそれでは主体性を喪失した世人に頽落してしまう。

　そこで自己の有限性に目覚め、「死の先駆的決意性」によって、死を予め決意して、一回きりの有限な人生をいかに有意義に生きるか主体的に決断しなければならないという。  
　実存の苦悩の中で存在の意味を求めて、歴史的運命に自己を投げ出していく、そうしてこそ、「存在の明るみに立つ」という意味の実存が開明されるという。  
　そこでハイデッガーは存在者と存在の区別を持ち出し、これまでの哲学者は存在者について語っただけで、存在そのものを語らなかったという。それは存在者の殻を破って存在の明るみに立つということで、脱自つまりエクスタシーということかもしれない。  
　榊はハイデッガーの講義を終えて、榊に電話したがつながらない。胸騒ぎがして中国総領事館に三Ｌ学習会のメンバーと向かう。陽一と智子は明道と玉泉が棲んでいた法燈館を訪ねた。  
　すると大阪総領事館には鄧王林は務めておらず名古屋総領事館に勤務していることが分かり、連絡を取ったところ、大手門高校に来たのは偽者だったことが分かり、孫明道も拉致されていたのである。  
　なんと翌日次期共産党主席と目されている崔一平の来日が予定されており、それと連動した拉致事件らしい。明道や玉泉が崔を襲おうとしているグループと無関係しているとみて、領事館が予防拘禁していないかどうか尋ねたが、中国の民主化運動は非暴力主義なので、その心配はないという返答だった。  
　陽一と智子が訪ねた法燈館で二人は、王法燈に話を聴いた。やはり崔一平の来日と関係ありそうなのだが、崔が保守派で民主化を阻止しているのなら、民主派非暴力主義だから暗殺計画はない。逆に崔が民主化に踏み切りそうなら、それを止めようと暗殺に回るのは保守派である。それを止めようとするのは民主派ということになる。しかし明道は保守派とは見なされていないので、明道が拉致されるのは理屈に合わない。  
　結局、明日の崔一平の来日で動きがあるはずなので、その結果５日も予定通り三Ｌ学習会を行い、その結果を見てから救出運動のやり方を考えようということになった。  
　５日、崔の来日は、拉致事件のせいで夜にずれこみそうだった。学習会は予定通り行われた。孫が欠けたので、陽一と智子も朝から参加した。陽一は自分がどうしても解けなかった難問をいくつかＵＳＢチップに入れて、画像をスクリーンに映して解説してもらった。  
　明道のやり方を習い覚えた生徒たちは、基礎の原理を確認し、類型をはっきりさせ、それに使う原理や定理を示し、そしてその問題の特徴をはっきりさせた。そこから解き方を考えると難問が難問でなくなるのだった。群れて学習するのを嫌がっていた陽一も、自意識過剰からきていると反省し、教え合い、学び合う学習の素晴らしさを実感して、今からでも入れてもらおうと思ったのである。

　榊の講義はサルトルに入った。サルトルは実存主義はヒューマニズムだと規定した。現に今ここにあるという現存在が人間であり、その意識のあり方に徹するのが実存主義だからである。  
　事物存在に対する意識存在が人間である。事物を存在としたら意識は無なので、無が人間のあり方だということになる。それは何者とも規定されないという意味であり、自由な存在ということである。  
　ところが人間は存在によって拘束されて規定されてしまう。つまり事物化されようとするのである。このような事物にされた自己に耐えられなくなり〈嘔吐〉せざるを得ない。そして自分を拘束する状況にノン！と否定の叫びを挙げ、状況変革すなわち自己変革に参画（アンガージュマン）せざるを得ないのだ。  
　それじゃあ、我々にとって何がアンガージュマンになるのかと質問されて、榊は、今や日本の停滞が財政危機や国家危機を呼んでおり、その根底に教育の荒廃と学力低下問題がある。だから三Ｌ学習会で、個人の学習計画に基づいて教育プランをたて、学年や小中高大の垣根を取っ払うような教育改革の方法が探って行けるのではないか、三Ｌ学習会こそ日本を救い、人類を救う自己変革であり、状況変革ではないかと指摘した。  
　実は孫明道を拉致したのは、共産党の恐怖独裁にはテロで対抗せざるを得ないとする憲政革命党の陳孟利だった。彼は明道に明道の実の父は智仁ではなく、智仁の兄の孫龍口だといい、かれは天安門事件で収容所で五年間強制労働させられ、放免後結婚したが間もなく、地下活動が露見して取り調べられ、そこで暴行を受けたらしい。その時に取り調べを指揮していたのが崔一平だったという。それが原因で内臓を痛め、病院で治療後家に戻されたが衰弱死した。その後妻の陸水仙さんは龍口の弟智仁と結婚したが、その時には明道を身籠っていたというのである。

　ようするに崔一平は明道の父の仇なので敵討ちをするなら協力しようという申し出であった。明道は徹底した非暴力主義者なので断固として申し出を拒否した。  
　榊たちは講義を終えると中国総領事館に向かった。崔副主席の到着は遅れていたが、報道陣が大勢詰めかけていて、榊や三Ｌ学習会のメンバーに質問が集中した。そこで孫明道の救世主的なスーパーヒーローぶりを大いにアピールしたのである。感極まって泣き続ける生徒も十人近くいた。  
　そこで陽一は、街頭で救出を叫ぶよりも、三Ｌ学習会を続けて意義をアピールする方が救出の近道だと提案した。智子もいまや孫明道は三Ｌ学習会に成っているのだから、孫明道の命の尊さを訴えるのは、三Ｌ学習会を見てもらうことだと語った。それで取材を制限して、学習会の雰囲気を乱さないようにして行うことになった。  
　ワイドショーでも取り上げられ、ニュースキャスターはここに教育再生の希望がある、沈みかけていた日本列島を再び隆起させる鍵があるとまでいったのである。  
　深夜榊宛にメールが入り、孫明道からの無事で二・三日で解放されるとの伝言が伝えられた。  
　６日学習会開始にあたって上村陽一から明道の伝言メールが紹介された。そして朝９時からの領事館での崔副主席の記者会見があり、榊も同席した。そこで榊がメールを報道陣に伝えなかったことや、三Ｌ教は宗教で提唱者の榊は憲法で禁止されている宗教活動を公立高校でしているのではないかとか、孫は三Ｌ教を地盤に民主化運動を広げようとしており、政治利用しているのではないかという質問が相次いだのである。昨日までヒーロー視していながら、一夜あけたらもう荒さがしや批判になる、マスコミの豹変ぶりに榊は呆れていた。　　　　　　　　**続く**